The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	発達段階における親子間の身体接触に関する研究 ：日韓の幼稚園児と小・中学生の両親からの報告を中心に
Author(s)	曺, 美庚; 釘原, 直樹
Citation	対人社会心理学研究. 2018, 18, p. 103-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70547
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

発達段階における親子間の身体接触に関する研究 [1) 2)]

―日韓の幼稚園児と小・中学生の両親からの報告を中心に―

曺　美庚(阪南大学国際コミュニケーション学部)
釘原　直樹(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究では、幼稚園期から中学生期までの発達段階ごとに、親子間の身体接触度合いの推移を考察し、発達段階別の身体接触行動の日韓差を検討した。日本の関西地方の幼稚園児と小・中学生(計 520 名)の両親と韓国のソウル市と大邱市の幼稚園児と小・中学生(計 577 名)の両親を対象に質問紙調査を行った。分散分析の結果、幼稚園期と中学生期において，韓国の方が日本より身体接触度合いが高かった。小学生期は、両国の両親はほぼ同程度の身体接触を用いながら子供を養育しているが、中学生期には日韓の間で身体接触行動にとりわけ大きな変化が見られ、日本では親から子供への身体接触が急減するという結果が示された。このような結果は中学生本人への調査結果からも裏付けられた。中学生期は自我の発達が著しい発達段階であることを踏まえると、この期における日韓差は身体接触に対する文化規範の内在化の現れであると解釈できる。なお、先行研究(曺・釘原, 2017)で示された大学生の回想による発達段階ごとの接触経験度と、各々の発達段階の子供を持つ両親の現在の接触経験度は、日本の男子大学生を除けば概ね一致しているといえる。

キーワード：身体接触、発達段階、文化差、認識差、文化内在化

問題

身体接触は自分の存在を直接的に相手に伝えるコミュニケーションのもっとも基本的な方法であり、あらゆる種類の対人関係に大きな影響を及ぼす(e.g., Argyle, 1988; 大坊, 1998; Montagu, 1978; Patterson, 2011)。また、気持ちや感情を伝えるためのもっとも効果的な手段であり、人々は接触によって、相手を心配したり、尊重したり、相手に興味を持っていることを知らせることができ、愛、思いやり、温かさ、怒り、喜び、悲しみなどの多様な感情状態を伝えられる。しかしながら、接触の意味合いは文化によって大きく異なるといわれている(Frank, 1982; Gudykunst & Kim, 1997; Klopf, 1998; Richmond & McCroskey, 2004)。仮に、高接触文化 [3)] の人と非接触文化の人が相互にコミュニケーションをとる場合、高接触文化の人は非接触文化の人から冷たさや距離感を感じることがあるが(Hall, 1966)、同じ非接触文化内であっても、身体接触度合いが有意に異なる文化間であれば同様のことがいえそうである。異文化コミュニケーションの文脈でこのような意図せぬ誤解を回避するためには、互いの接触規範を理解し合い受け入れる必要があろう(曺・釘原, 2016, 2017; Richmond & McCroskey, 2004)。また、各々の文化における身体接触の規範を個人がどの発達段階で内在化し定着させるのかについての理解も重要である。

本研究では、幼稚園期・小学生期・中学生期といった発達段階ごとに親子間の身体接触行動を分析することで、日韓の間で身体接触行動に文化差が現れるのは発達段階のどの時点であるかを明らかにする。

発達的観点と身体接触

身体接触は直接的で明確なメッセージを持つコミュニケーション・チャネルであり(仁平・残間・平田・Foster, 1998)、発達的要因や人間関係の質、文化的要因などを反映する行動である(残間・仁平, 1997)。幼児期や児童期の身体接触には社会的価値があり、親子間の絆の強化や満足できる対人関係の構築おいて重要な役割を果たす(Ainsworth, 1978; Burgoon & Saine, 1978)。ただ、幼児期から児童期になるにつれて接触の頻度が減り、青年期になると小学生期初期頃の半分にまで身体接触量が減少するといわれる(Willis & Hofman, 1975)。成人期になると、多くの社会では、他者との身体接触の量や形に責任が求められるようになり、文化によって接触規範が強制され(Boderman, Freed, & Kinnucan, 1972; Jones & Yarbrough, 1985; Schutz, 1971; Willis & Hofman, 1975)、成人期の段階では文化差はかなり顕著になる(Remland, Jones, & Brinkman, 1991; Shuter, 1976)。

身体接触を発達的観点から検討した先行研究において、日本人の身体接触は成長とともに急激に減少していくという特徴が示された。Barnlund(1973)は、日米ともに幼児期は親密性の高い身体接触があるものの、成人初期頃から異なった方向に進み、アメリカでは継続して身体接触が保たれ、接触が自分の態度を表す重要な方法であるが、日本では児童期以降は身体的親密さが急激に減少し、成長とともに身体接触が内面の気持ちを表現する方法として用いられなくなるという。Montagu(1978)も、日本の幼児はアメリカの幼児に比べはるかに親から

多くの接触刺激を受けるが、成長とともに身体接触が激減すると指摘している。平田・仁平・残間・Foster(1998)の日ボリビア比較においても、ボリビアでは親との接触の頻度が多く、接触は好意的に受け止められ、青年期以降も友人より親との接触が重視される傾向があるのに対し、日本では青年期以降に人間関係の重心が両親から友人に移行し、両親より友人との接触頻度が多くなることが報告されている。親との身体接触が成長とともに急減する日本人の特徴は、鈴木・春木(1989)や、呉・宇津木(2008)の日中比較、曺・釘原(2017)の日韓比較などにおいても確認されている。

一方、韓国では身体接触に寛容的な文化が存在し、女性同士が手をつないで歩いたり、男性もよく接触する傾向があるなど、身体接触は日常的に用いられる重要なコミュニケーション・チャネルの一つとして積極的に活用され、親子間や友人間で親密感を伝え合う重要な役割を果たしているとされる(曺, 2010; 曺・釘原, 2017; 林, 1984; 大崎, 2006)。また、身体接触経験度を認知的回想によって発達段階ごとに調査した曺・釘原(2017)の日韓比較では、成長に伴う身体接触度合いの減少幅が日本人大学生より韓国人大学生の方が小さいという結果が出ており、発達的観点においても日韓の間には違いが推察される。

研究目的

本研究では、発達的観点から身体接触行動の日韓比較を行い、身体接触行動に文化差が現れるのは発達段階のどの時点であるかを示すことを研究の目的とする。曺・釘原(2016, 2017)による身体接触の日韓比較研究において、日韓は同じ非接触文化圏に属しながらも接触行動に大きな差があり、発達段階ごとの接触経験度にも有意な違いがあることが確認された。しかし、日韓比較の調査対象が大学生に限定されていることや、過去の回想により接触経験度を調査していることなどが限界として挙げられた。本研究では、これらの限界を克服すべく、幼少期及び中学生期といった各発達段階で、両親が自分の子供に対して行った身体接触の度合いを直接調査することで、成長に伴う身体接触行動の変化を分析し、日韓の間で文化差が現れるのはどの発達段階であるかを明らかにする。また、曺・釘原(2016, 2017)による大学生の調査との比較によって、大学生の回想による回答と各発達段階の子供を持つ両親の現在の回答との認識差についても検討を行い、解釈を試みる。なお、本研究で用いる発達段階の区分は、鈴木・春木(1989)を参照し、幼稚園期、小学低学年期(小1から小3)、小学高学年期(小4から小6)、中学生期といった4つの時期とした。

方法

調査時期

日本での調査は2012年11月から2013年7月にかけて行われ、韓国での調査は2012年9月から2013年7月にかけて行われた。

調査対象者

日本と韓国において、両親を対象に親子間の身体接触の頻度に関する質問紙調査を行った。日本では、幼稚園児103名(男子53名, 女子50名, 平均年齢[4] = 4.62歳, *SD* = 0.94)、小学低学年生(2年生)145名(男子87名, 女子58名, 平均年齢 = 7.85歳, *SD* = 0.36)、小学高学年生(4年生)134名(男子68名, 女子66名, 平均年齢 = 9.81歳, *SD* = 0.39)、中学生138名(男子62名, 女子76名, 平均年齢 = 13.78歳, *SD* = 0.43)の両親を調査・分析した。韓国では、幼稚園児165名(男子80名, 女子85名, 平均年齢 = 4.82歳, *SD* = 0.70)、小学低学年生(2年生)140名(男子72名, 女子68名, 平均年齢 = 7.80歳, *SD* = 0.48)、小学高学年生(4年生)133名(男子67名, 女子66名, 平均年齢 = 9.77歳, *SD* = 0.49)、中学生139名(男子48名, 女子91名, 平均年齢 = 13.69歳, *SD* = 0.55)の両親を調査・分析した[5]。また、中学生については、両親の調査に加え、中学生本人にも同様の質問紙調査を行った。未回収分や記入漏れのあるもの、父親や母親がいないと回答したもの、別居等の理由で父親や母親に会う回数が極端に少ないと答えたものなどは除外されている。

手続き

日本での調査の場合、関西地方の幼稚園1園、小学校2校(私立1校, 公立1校)と公立中学校1校において、園児や生徒の両親を対象に園と学校を通じて質問紙を配布・回収した。韓国での調査の場合も、大邱市の幼稚園2園、小学校1校、中学校2校(ソウル市1校と大邱市1校)において、園児や生徒の両親を対象に園と学校を通じて質問紙を配布・回収した。日韓ともに、中学生には別途中学生本人用の質問紙を配布・回収した。

調査内容

身体接触を「日常生活の中で行われる悪意をもたない身体接触、すなわち、なでたり、さすったり、軽く触れたり、手を握ったり、腕や肩を組んだり、握手やハグをするなどの親密表現としての肯定的な接触」に限定した上で調査を行った。否定的な接触あるいは偶発的な接触を含まない、親密表現としての身体接触のみを調査対象とした。

接触頻度調査　父親と母親のそれぞれが子供に対して行う接触(能動接触)と父親と母親のそれぞれが子供から受ける接触(受動接触)について、身体の各部位ごとに過去1年間どの程度の肯定的接触の授受を行ったかについて尋ねた。

本調査では、Jourard(1966)の分類のうち、目・鼻・口・

耳を一つ(顔)にまとめ、首の前後、大腿部の前後、脚の前後をそれぞれ統合した 18 分割の身体図を用いて身体部位ごとの接触頻度を調べた。父親と母親のそれぞれが子供に対して行った接触と父親と母親のそれぞれが子供から受けた接触について、4 つのケースを別々のシートにし、順番をずらして提示することで、カウンターバランスがとれるよう配慮した。各対象者への身体部位ごとの接触の有無に加え、接触の頻度(少・中・多)をも回答させ、接触無に 0 点、少に 1 点、中に 2 点、多に 3 点を与え、それを各部位ごとの接触頻度得点とした。

接触経験度調査　大学生を対象とした先行研究(曺・釘原, 2017)では、過去を振り返るという方法によって発達段階ごとの接触経験度が調査されている。この調査結果と各発達段階の子供を持つ両親の現在の認識とのギャップを確認すべく、両親を対象に現在の発達段階における子供との接触経験度を自己評定してもらった。尺度は鈴木・春木(1989)を参照し、1(まったく触らなかった)から 10(非常によく触った)までの 10 段階で回答を求めた。なお、日本語版と韓国語版の質問紙については、第 3 者によるバックトランスレーションの手続きを経て等質性と整合性を確保した。調査結果の分析には、IBM SPSS Statistics ver.22.0 を用いた。

結果

「接触」と「被接触」間の相関関係

父親と母親から子供への接触頻度得点の合計点(18 部位合計)と子供から父親と母親への被接触頻度得点の合計点(18 部位合計)間の相関を発達段階別に分析した。日本の場合、相関係数は、父親と子供(幼稚園児 $r = .79$, 小学低学年生 $r = .82$, 小学高学年生 $r = .81$, 中学生 $r = .72$)、母親と子供(幼稚園児 $r = .59$, 小学低学年生 $r = .78$, 小学高学年生 $r = .78$, 中学生 $r = .67$)のいずれにおいても有意であった(すべて $p < .001$)。同様に、韓国の場合も、父親と子供(幼稚園児 $r = .67$, 小学低学年生 $r = .73$, 小学高学年生 $r = .75$, 中学生 $r = .75$)、母親と子供(幼稚園児 $r = .69$, 小学低学年生 $r = .76$, 小学高学年生 $r = .76$, 中学生 $r = .78$)のいずれにおいても相関は有意であった(すべて $p < .001$)。両親と子供間の接触と被接触の間に高い正の相関があったので、調査結果の分析においては、両親から子供への接触(能動接触)を主な分析対象とした。

身体接触度の日韓比較

両親から子供への接触頻度得点の合計点(18 部位合計)を身体接触度(総合指標)の尺度得点とした。身体接触度における日韓間の違いを明らかにすべく、身体接触度を従属変数とする、2(文化: 日, 韓)×2(性: 男, 女)×4(学年: 幼, 小低, 小高, 中)の 3 要因分散分析を行った。

分析の結果、父親から子供への身体接触度において、文化($F(1, 1081) = 16.66$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .02$)、性($F(1, 1081) = 7.68$, $p < .01$, $\eta_p^2 = .01$)、学年($F(3, 1081) = 137.14$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .28$)の主効果と、文化×学年の交互作用が有意であった($F(3, 1081) = 3.51$, $p < .05$, $\eta_p^2 = .01$)。下位検定として単純主効果の検定を行った結果、幼稚園期における文化の単純主効果($F(1, 1081) = 10.27$, $p < .01$, $\eta_p^2 = .01$)と中学生期における文化の単純主効果($F(1, 1081) = 15.85$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .01$)が有意で、幼稚園期では日本($M = 26.09$, $SD = 10.58$)より韓国($M = 30.66$, $SD = 11.89$)の方が父親から子供への身体接触度が高く、中学生期においても日本($M = 5.99$, $SD = 6.91$)より韓国($M = 11.60$, $SD = 9.95$)の方が身体接触度が高かった。また、日本($F(3, 1081) = 76.76$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .18$)と韓国($F(3, 1081) = 68.70$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .16$)ともに、学年が上がるほど父親から子供への身体接触度が有意に減少していく傾向が見られた。日本の場合、小学高学年期($M = 18.92$, $SD = 12.21$)と中学生期($M = 5.99$, $SD = 6.91$)の間の減少幅がとりわけ大きく、日韓差は中学生期に顕著に現れている。

母親から子供への身体接触度においては、文化($F(1, 1081) = 16.56$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .02$)と学年($F(3, 1081) = 147.61$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .29$)の主効果と、文化×学年の交互作用が有意であった($F(3, 1081) = 5.12$, $p < .01$, $\eta_p^2 = .01$)。下位検定として単純主効果の検定を行った結果、幼稚園期における文化の単純主効果($F(1, 1081) = 11.56$, $p < .01$, $\eta_p^2 = .01$)と中学生期における文化の単純主効果($F(1, 1081) = 19.51$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .02$)が有意で、幼稚園期では日本($M = 31.79$, $SD = 8.85$)より韓国($M = 36.46$, $SD = 10.05$)の方が母親から子供への身体接触度が高く、中学生期においても日本($M = 12.33$, $SD = 9.08$)より韓国($M = 18.22$, $SD = 11.12$)の方が身体接触度が高かった。日本($F(3, 1081) = 88.36$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .20$)と韓国($F(3, 1081) = 69.43$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .16$)ともに、学年が上がるほど母親から子供への身体接触度が有意に減少していく傾向が見られた。日本の場合、小学高学年期($M = 26.52$, $SD = 12.12$)と中学生期($M = 12.33$, $SD = 9.08$)の間の減少幅がとりわけ大きく、母親からの身体接触度においても日韓差は中学生期に顕著に現れている。

発達段階別の接触経験度における認識差および日韓比較

各発達段階の子供を持つ両親が自分の子供に対してどの程度の接触を行ったか(接触経験度)を 10 件法で調査した結果と、先行研究(曺・釘原, 2017)で示された大学生の調査結果をグラフにしたのが Figure 1 である。

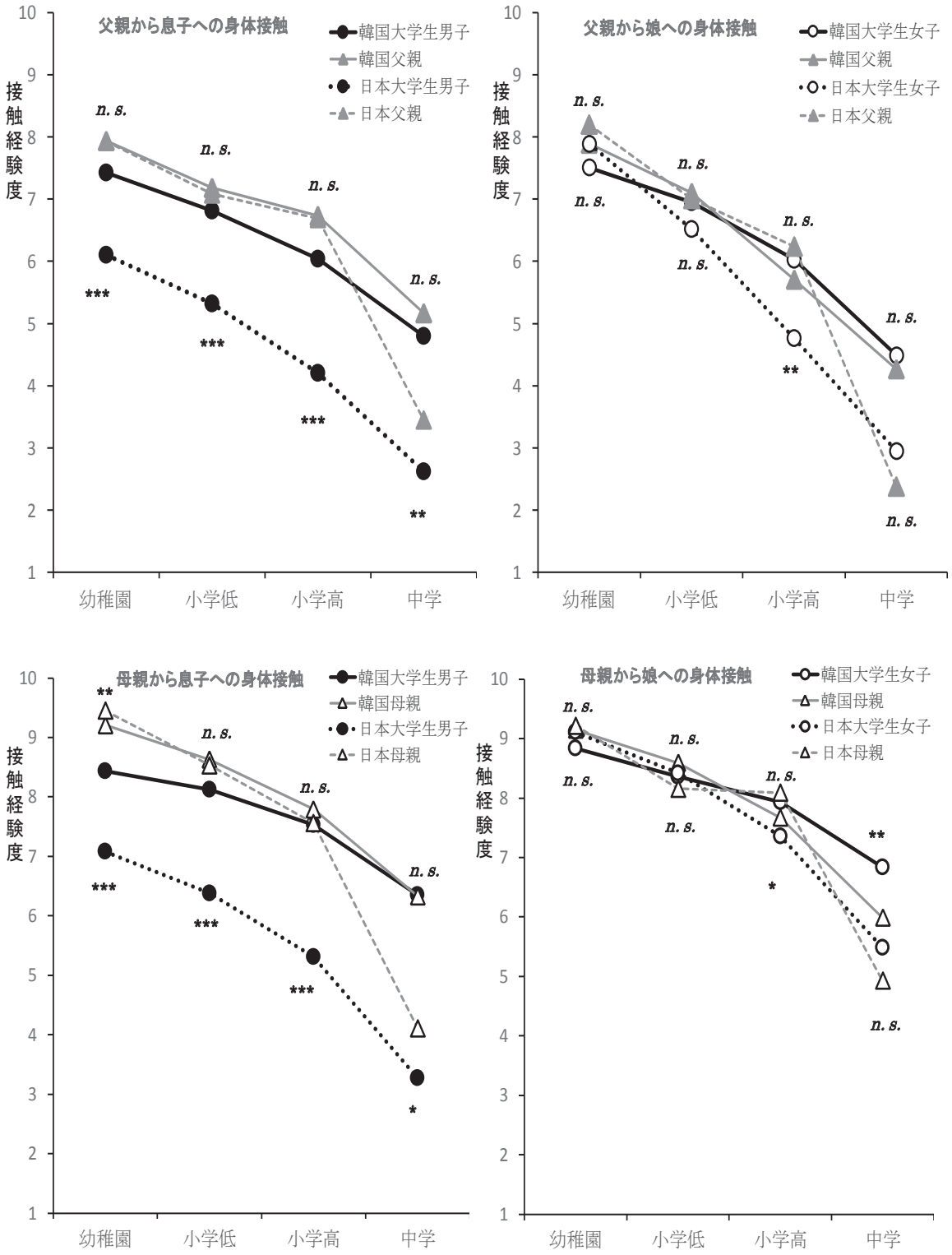

Figure 1　発達段階別の接触経験度における認識差

注)発達段階ごとに，グラフ上部のアスタリスク(*)と *n.s.*は韓国の親(幼・小・中)と大学生の認識差の有無を示し，グラフ下部のアスタリスク(*)と *n.s.*は日本の親(幼・小・中)と大学生の認識差の有無を示す。 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

前者は、現在の発達段階において両親が子供にどの程度の接触を行ったかを両親に尋ねたものであり、後者は、両親から発達段階ごとにどの程度の接触を受けたかを大学生に尋ねたもの(認知的回想)である。そのため、両者の間にはタイムラグに起因する認識差と親子間の立場の違いによる認識差が生じることが考えられる。

まず、父親から息子への身体接触においては、韓国の場合、幼稚園期から中学生期までの各発達段階で父親の認識と大学生の認識の間に有意な差は見られなかった。反面、日本の場合はすべての発達段階において有意差が認められる。類似の傾向は母親から息子への身体接触においても見受けられ、韓国において幼稚園期に母親(M = 9.21, SD = 1.16)と大学生(M = 8.43, SD = 1.85)の認識に有意差(t (174) = 3.30, p < .01)があることを除けば、その他の時期において韓国では認識差は示されないが、日本ではすべての時期において有意差が確認された。

また、父親から娘への身体接触の場合、日本において小学高学年期に父親(M = 6.24, SD = 2.70)と大学生(M = 4.77, SD = 2.67)の認識に有意差(t (168) = 3.49, p < .01)があることを除けば、日韓ともにいずれの時期においても父親の認識と大学生の認識の間に有意な差は見られなかった。母親から娘への身体接触においては、日本では小学高学年期に母親(M = 8.09, SD = 2.03)と大学生(M = 7.36, SD = 2.38)の認識に有意差(t (168) = 2.08, p < .05)があり、韓国では中学生期に母親(M = 5.99, SD = 2.49)と大学生(M = 6.84, SD = 2.01)の認識に有意差(t (205) = −2.71, p < .01)が示されたが、それ以外の時期においては母親の認識と大学生の認識の間に違いは見受けられなかった。

次に、Figure 1 のうち、両国の父親と母親のグラフのみに注目すると、4 つのパターンいずれにおいても、幼稚園期から小学高学年期までは接触経験度に日韓差は現れなかった。ところが、中学生期になると日韓差が大きく開き、父親から息子への接触経験度における日本(M = 3.45, SD = 2.09)と韓国(M = 5.17, SD = 2.62)の差(t (107) = −3.81, p < .001)と、父親から娘への接触経験度における日本(M = 2.38, SD = 1.67)と韓国(M = 4.27, SD = 2.24)の差(t (164) = −6.05, p < .001)はともに有意であった。同様に、母親から息子への接触経験度における日本(M = 4.11, SD = 2.10)と韓国(M = 6.33, SD = 2.31)の差(t (108) = −5.26, p < .001)と、母親から娘への接触経験度における日本(M = 4.93, SD = 2.79)と韓国(M = 5.99, SD = 2.49)の差(t (165) = −2.58, p < .05)も有意であった。

中学生期における子供から両親への身体接触

子供から両親への身体接触(両親の立場では受動接触)についても検討すべく、両親の回答をもとに、子供から両親への身体接触度を従属変数とする、2(文化: 日, 韓)×2(性: 男, 女)×4(学年: 幼, 小低, 小高, 中)の 3 要因分散分析を行った。分析の結果、子供から父親への身体接触度において、文化×学年の交互作用が有意であった(F (3, 1081) = 4.86, p < .01, η_p^2 = .01)。下位検定として単純主効果の検定を行ったところ、中学生期における文化の単純主効果(F (1, 1081) = 13.91, p < .001, η_p^2 = .01)が有意で、日本(M = 4.01, SD = 5.81)より韓国(M = 9.12, SD = 9.55)の方が身体接触度が高かった。また、子供から母親への身体接触度においても、文化×学年の交互作用が有意であり(F (3, 1081) = 5.02, p < .01, η_p^2 = .01)、下位検定として単純主効果の検定を行った結果、中学生期における文化の単純主効果(F (1, 1081) = 14.09, p < .001, η_p^2 = .01)が有意で、日本(M = 6.91, SD = 7.01)より韓国(M = 12.07, SD = 10.26)の方が身体接触度が有意に高かった。中学生期における子供から両親への身体接触度については、両親の回答と中学生本人の回答の詳細を Table 1 に示した。

次に、中学生本人の回答に限定した上で、日本の中学生と韓国の中学生の両親への身体接触度を比較した。男子中学生から父親への身体接触度では日本(M = 1.74, SD = 2.73)より韓国(M = 11.15, SD = 10.98)の方が高く(t (108) = −6.50, p < .001)、女子中学生から父親への身体接触度においても日本(M = 3.57, SD = 5.23)より韓国(M = 9.23, SD = 7.74)の方が有意に高かった(t (165) = −5.43, p < .001)。同様に、男子中学生から母親への身体接触度では日本(M = 1.36, SD = 2.32)より韓国 (M = 10.31, SD = 9.16)の方が高く(t (108) = −7.41, p < .001)、女子中学生から母親への身体接触度においても日本(M = 6.30, SD = 7.08)より韓国(M = 12.20, SD = 9.24)の方が有意に高いという結果が示された(t (165) = −4.56, p < .001)。

また、両親を対象にした調査結果と中学生本人を対象にした調査結果を同時分析することで、子供から両親への身体接触度における中学生自身の認識と両親の認識間の相違を確認した。中学生から両親への身体接触度を従属変数とする、2(文化: 日, 韓)×2(性: 男, 女)×2(回答者: 親, 子)の 3 要因分散分析を行った結果、中学生から父親への身体接触度においては、 文化の主効果のみが有意であり(F (1, 546) = 91.00, p < .001, η_p^2 = .14)、父親の認識と中学生自身の認識の間に有意差は見られなかった(F (1, 546) = .03, *ns*)。反面、中学生から母親への身体接触度においては、文化(F (1, 546) = 74.01, p < .001, η_p^2 = .12)と性(F (1, 546) = 20.07, p < .001, η_p^2 = .04) の主効果に加え、回答者(親子)の主効果が有意

Table 1　中学生から両親への身体接触度の平均値と標準偏差

	日本				韓国			
	男子（n = 62）		女子（n = 76）		男子（n = 48）		女子（n = 91）	
回答者	M	（SD）	M	（SD）	M	（SD）	M	（SD）
父親への身体接触度								
父親	4.36	(6.13)	3.72	(5.55)	8.67	(9.05) **	9.36	(9.85) ***
中学生本人	1.74	(2.73)	3.57	(5.23)	11.15	(10.98) ***	9.23	(7.74) ***
母親への身体接触度								
母親	5.26	(5.33)	8.25	(7.91)	10.13	(8.31) ***	13.09	(11.06) **
中学生本人	1.36	(2.32)	6.30	(7.08)	10.31	(9.16) ***	12.20	(9.24) ***

注)男子の日韓差と女子の日韓差は、それぞれ韓国側にアスタリスク(*)で示した。

***p < .001, **p < .01

であり、中学生本人が母親に対して行ったと答えた身体接触度（M = 7.83, SD = 8.62)より母親が中学生の子供から受けたと回答した身体接触度(M = 9.50, SD = 9.15)の方が有意に高かった(F(1, 546) = 5.27, p < .05, η_p^2 = .01)。

考察

発達段階別の日韓差と接触経験度の認識差

本研究では、日本と韓国の幼稚園期、小学生期、中学生期の子供を持つ父親と母親を対象に、親子間の身体接触について調査し、総合指標としての身体接触度（18部位への接触頻度得点の合計点）と発達段階別接触経験度を分析した。前者については、2(文化: 日, 韓)×2(性: 男, 女)×4(学年: 幼, 小低, 小高, 中)の3要因分散分析の結果から、両親から子供への身体接触度は幼稚園期と中学生期に日韓差が出ており、日本より韓国の方が身体接触度が高いことが示された。両国ともに、学年が上がるほど両親から子供への身体接触度が有意に減少していく傾向も確認できたが、日本の場合、小学高学年期から中学生期の間の減少幅がとりわけ大きいことから、両親から子供への身体接触度における日韓差は実質的に中学生期から生じていると推察された。

また、発達段階別接触経験度においては、父親から子供への身体接触の場合、韓国の男子大学生と韓国の女子大学生の認識と父親の認識の間に有意差は見られなかった。日本の女子大学生と父親との認識差も小学高学年期以外の発達段階では示されなかった。類似の傾向は母親から子供への身体接触の場合にも見受けられ、韓国の男子大学生は幼稚園期、韓国の女子大学生は中学生期、日本の女子大学生は小学高学年期にそれぞれ母親の認識との間に有意差が現れているが、それ以外の段階では母親と大学生の認識に有意差は見られなかった。ただ、日本の男子大学生の場合、認知的回想によって回答した接触経験度がすべての発達段階において低い水準にあったことから、両親の認識と大学生の認識の間にはすべての発達段階において有意な差が現れた。

曺・釘原(2016, 2017)の調査では、日本男子＜日本女子＜韓国男子＜韓国女子の順に身体接触の度合いが高まり、日本男子は身体接触にとりわけ消極的であることが示された。日本の男子大学生の場合、現在の低い身体接触度合いが基準となり、過去の接触経験度を過小評価している可能性がある。概して、日韓の大学生の回想による発達段階ごとの接触経験度と、現に各々の発達段階の子供を持つ両親の接触経験度の間の認識差は、日本の男子大学生の場合を除けばそれほど大きいとはいえない。

発達段階別接触経験度においては、日本の両親と韓国の両親の間の差が中学生期においてはっきりと現れている。この差は、身体部位ごとの接触頻度得点をもとにした身体接触度の日韓比較の結果と、それを裏付ける中学生本人の調査結果からも明らかとなっており、これらの分析結果を総合すると、中学生期が身体接触行動において日韓文化差が生じる起点であると推察される。

接触文化の内在化

文化は学習されるものであり、どの文化でも子供は幼いときから、態度や信念、価値観、行動、言語、儀礼、歴史、好み、その他大量の概念を、同じ文化の大人や友達などから教わる(Thomas-Maddox & Lowery-Hart, 1998)。小さな子供たちのほとんどは、家庭でたくさんの接触を受けてきているが、成長すると接触が減少し、概ね 12 歳くらいで大人の接触規範を学習するといわれている(Richmond & McCroskey, 2004)。また、一般的に

青年期に分類される時期(12 才前後からの約 10 年間)は、自己の形成・発達の過程において自己再構成の時期にあたり、価値観の形成や社会的役割の取得を主体的に行いつつ自分らしさを作り上げる時期であるともいわれている(Ausbel, Montemayor, & Svojiar, 1977)。

すなわち、中学生の時期は、自己が属する文化の中で望ましいとされる態度、価値観、行動様式や規範に敏感に反応しながら、自己のあり方や自己の属する文化規範の内在化を進め、周囲の人々との良好な人間関係の構築の仕方を模索しつつ、段々と文化規範の内在化を進展させる時期であると推察される。幼少期は親の養育態度や親子関係など家族を参照対象とした文化内在化が展開されるが、小学高学年期や中学生期は、家族から学校や友人に社会化の参照対象が移され、社会との関わりや相互作用の過程の中から、社会集団の価値、規範、行動様式について望ましいとされる部分を受け入れ、内的葛藤から自己を調整したり自己を強化したりしながら、自己を再構築し始めるのではないかと推察される。

本研究の結果、身体接触度および接触経験度のいずれにおいても、中学生期に日韓差がもっとも大きく現れた。身体接触は接触相手との相互作用の結果として行われるものであることを踏まえると、日本における親子間の身体接触の急減は、親のもつ接触規範の現れであると同時に、子供による接触規範に関する文化内在化の現れであると推察される。大学生を対象とした曺・釘原(2016)の調査では、文化は父親や母親へのタッチ性向(身体接触を行う傾向)のみならず同性親友へのタッチ性向とも深く関わっているという結果が示された。このような結果は、内在化された接触規範が親子関係に留まらず、友人関係においても発現され、日常的な身体接触行動に文化差を生じさせる要因であることを示唆するものである。

なお、先行研究(曺・釘原, 2017)の結果によれば、日韓間で発達段階のある時点で一度有意差が出ると、その有意差はその後大学生期まで持続するという結果が出ている。曺・釘原(2017)の結果と今回の調査結果を総合すると、身体接触は中学生期に日韓間で有意差が現れ、その後成人になるまで身体接触度の差が縮まることはなく、結果的に韓国人の方が日本人より身体接触を多く用いたコミュニケーションを実践していると結論付けられる。そして、日韓間の有意差は、日韓それぞれにおいて異なる接触規範が、文化内在化を通じ個人の行動を形作った結果であると解釈することができる。そのため、日韓の間の異文化コミュニケーションの場面では、両国文化の類似性のみならず、接触規範の違いに起因する異質性への配慮が必要といえる。

本研究の限界と課題

本研究の限界として、身体接触の度合いの測定を質問紙調査によって行っていること、主な調査対象が両親であることなどが挙げられる。父親と母親は子供の養育者の立場であるため、調査において、親密表現としての肯定的身体接触を多く行うことがよい養育者の証しであるという親バイアスがかかっている可能性がある。さらに、身体接触を含む非言語行動は無意識的に行われることが多いため、質問紙調査の手法では、実際の接触量ではなく接触量の自己認知を測定している可能性があることや、接触量の認知に文化が影響している可能性を排除できないといった限界がある。こうした限界を踏まえ、今後は、観察方法を用いるなどして、身体接触行動の文化差をより明確にしていく必要がある。

一方、身体接触に関するアジア文化圏内の比較研究が少ない中で、日韓比較の観点から、幼稚園期および小・中学生期の身体接触について両親を主対象とした実証研究を行った点、発達的観点から縦断的に日韓差の説明を試み、身体接触の度合いに有意な変化が起きる発達段階を特定した点などは本研究の意義といえよう。今後、身体接触行動に有意な変化が起きる中学生期を中心に、身体接触による自己表出や親子関係の構造を巡る議論をさらに深めていく必要がある。

引用文献

Ainsworth, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation.* Hillsdale, NJ: Erlbaum.(依田 明(訳)アタッチメント: 情緒と対人関係の発達 金子書房)

Argyle, M. (1988). *Bodily Communication*(2nd ed.). Madison: International Universities Press.

Ausbel, D. P., Montemayor, R., & Svojiar, P. N. (1977). *Theory and problems of adolescent development* (2nd ed.). NY: Grune and Stratton.

Barnlund, D. C. (1973). *Public and private self in Japan and the United States.* Tokyo: The Simul Press Inc. (バーンランド, D. C. 西山 千(訳)(1973). 日本人の表現構造 サイマル出版会)

Boderman, A., Freed, D. W., & Kinnucan, M. T. (1972). Touch me, like me: Testing an encounter group assumption. *Journal of Applied Behavioral Science, 8,* 527-533.

Burgoon, J. K., & Saine, T. J. (1978). *The Unspoken Dialogue: An Introduction to Nonverbal Communication.* Boston, MA: Houghton Mifflin.

曺 美庚(2010). 対人関係における親密さとスキンシップ許容度――韓国人大学生の分析結果を中心に―― 九州大学大学院比較社会文化学府紀要比較社会文化, *16,* 73-85.

曺 美庚・釘原 直樹(2013). パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響――日本の中学生とその保護者に対する調査分析を中心に―― 日本社会心理学会第 54 回大会発表論文集, 435.

曺 美庚・釘原 直樹(2016). 日韓大学生のパーソナリティがタッチ性向に及ぼす影響 日本社会心理学会第 57 回大会発表論文集, 103.

曺 美庚・釘原 直樹(2017). 親しい相手との身体接触に関する日韓比較研究 応用心理学研究, *43*, 45-53.
大坊 郁夫(1998). しぐさのコミュニケーション――人は親しみをどう伝えあうか―― サイエンス社.
DiBiase, R. & Gunnoe, J. (2004). Gender and culture differences in touching behavior. *Journal of Social Psychology*, *144*, 49-62.
Frank, L. K. (1982). Cultural patterning of tactile experiences. In L. A. Samovar & R. E. Porter (eds.), *Intercultural Communication: A Reader* (3rd ed.), *285-289*. Belmont, CA: Wadsworth.
呉 英妍・宇津木 成介(2008). 中国と日本の大学生における接触行動の発達的変化――主観的評定値に基づく比較―― 神戸大学国際文化学紀要, *19*, 17-28.
Gudykunst, W. B., & Kim, Y. Y. (1997). *Communicating with Strangers: An Approach to Intercultural Communication* (3rd ed.). NY: The McGraw-Hill Companies, Inc.
Hall, E. T. (1966). *The hidden dimension* (2nd ed.). Gardner City, NY: Anchor Books.
林 建彦(1984). 日本人と韓国人との表現構造比較研究――D.C.バーンランドの日・米比較を基礎として―― 東海大学文学部紀要, *41*, 113-136.
平田 忠・仁平 義明・残間 理恵・Foster, M. (1998). 身体接触に反映された親子関係の文化的差異(3) ――日本とボリビアの親子間の身体接触頻度の発達的変化―― 東北心理学研究, *48*, 48.
Jones. S. E. & Yarbrough, A. E. (1985). A naturalistic study of the meanings of touch. *Communication Monographs, 52,* 19-56.
Jourard, S. M. (1966). An exploratory study of body-accessibility. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, *5*, 221-231.
Klopf, D. W. (1998). *Intercultural Encounters: The Fundamentals of Intercultural Communication* (4th ed.). Englewood, CO: Morton.
Lustig, M. W., & Koester, J. (1996). *Intercultural competence: Interpersonal communication across cultures* (2nd ed.). NY: HarperCollins.
Mazur, A. (1977). Interpersonal spacing on public benches in contact vs. noncontact cultures. *Journal of Social Psychology*, *101*, 53-58.
Montagu, A. (1978). *Touching: The Human Significance of the Skin* (2nd ed.). NY: Harper & Row, Publishers.
仁平 義明・残間 理恵・平田 忠・Foster, M. (1998). 身体接触に反映された親子関係の文化的差異(1) ――日本とボリビアの親子間の身体接触に対する反応の因子構造―― 東北心理学研究, *48*, 46.
大崎 正瑠(2006). 日韓異文化コミュニケーションの一研究――在韓国日系企業のアンケート調査より――東京経済大学紀要コミュニケーション科学, *24*, 215-228.
Patterson, M. L. (2011). *More than words: The power of nonverbal communication*. Editorial Aresta. (大坊郁夫(監訳)(2013). ことばにできない想いを伝える――非言語コミュニケーションの心理学―― 誠信書房)
Remland, M. S., Jones, T. S., & Brinkman, H. (1991). Proxemic and haptic behavior in three European countries. *Journal of Nonverbal Behavior, 15,* 215-232.
Richmond, V. P., & McCroskey, J. C. (2004). *Nonverbal Behavior in Interpersonal Relations* (5th ed.). Pearson Education, Inc. (山下 耕二(編訳)(2006). 非言語行動の心理学――対人関係とコミュニケーション理解のために―― 北大路書房)
Schutz, W. (1971). *Here Comes Everybody.* NY: Harper & Row.
Shuter, R. (1976). Proxemics and tactility in Latin America. *Journal of Communication, 26,* 46-52.
鈴木 晶夫・春木 豊(1989). 対人接触に関する試験的研究 早稲田心理学年報, *21*, 93-98.
Thayer, S. (1988). Close encounters. *Psychology Today, 22,* 31-36.
Thomas-Maddox, C., & Lowery-Hart, R. (1998). *Communicationg with Diverse Students: A Text and Workbook.* Acton, MA: Tapestry Press.
Willis, F. N., & Hofman, G. E. (1975). Development of tactile patterns in relation to age, sex, and race. *Developmental Psychology, 11*, 866.
残間 理恵・仁平 義明(1997). 親子の身体接触に関する研究(4) ――小学生の親子の反応―― 東北心理学研究, *47*, 39.

註

1) 本研究の一部は、日本社会心理学会第 54 回大会(2013)にて報告された。

2) 本研究は、平成 26－28 年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究 C, 課題番号 26503016, 研究代表者:曺 美庚)と平成 29－32 年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究 C, 課題番号 17K02997, 研究代表者:曺 美庚)の助成を受けた。

3) 身体接触行動に関する多くの先行研究では、南欧・南米・中東は高接触文化に分類され(e.g., Hall, 1966; Lustig, & Koester, 1996)、北欧・北米・アジアは非接触文化に分類されている(e.g., DiBiase & Gunnoe, 2004; Mazur, 1977; Thayer, 1988)。高接触文化では、日常挨拶をハグやキスで交わすことが多い。

4) 性別と年齢は対象園児や生徒のものである。

5) 外国籍あるいは海外長期滞在の経験を有する対象者は調査から除外した。

Touching behaviors among parents and children at different developmental stages:

Based mainly on the reports by Japanese and Korean parents

Mikyung CHO (*Faculty of International Communication, Hannan University*)
Naoki KUGIHARA (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

This study examined the differences in touching behaviors between Japanese and Koreans at different developmental stages. A survey questionnaire was administered among the parents of 520 Japanese and 577 Korean children from kindergarten to junior high school. An analysis of variance revealed that the level of touch was significantly higher in Korea than that in Japan at the kindergarten and, especially, junior high school stages. While the parents of elementary school children used largely the same level of touch in both countries, the level of touch decreased rapidly among Japanese parents at the junior high school stage. These results were supported by the results obtained from the questionnaire survey administered among junior high school children themselves. The differences in touching behaviors between Japanese and Korean children at junior high school stage could be interpreted as a sign of internalization of cultural norms.

Keywords: touching behavior, developmental stage, cultural difference, cognitive difference, internalization of culture.